源氏物語と絵合

杉浦一雄

目次

一　はじめに
二　絵合の意義
三　絵合と政争
四　天徳内裏歌合
五　風騒の道

一　はじめに

これまでに私は、『源氏物語』第一部が『日本書紀』神代上のスサノヲノミコトをめぐる神話を源泉として書かれ(1)、光源氏が営んだ「六条院」がスサノヲノミコトの赴いた「根の国」に基づいて創作されたのではないかという仮説を展開してきた(2)。これらによれば、「六条院」は亡き人の霊が集まる「異郷」として位置づけることができ、光源氏の願いはそれらの霊をねんごろに鎮魂するところにこそあったと言うことになる。それゆえ、これまで政権獲得のための布石として受け取られてきた斎宮女御や明石姫君の入内もまた、亡き女君たちへの鎮魂として解釈すべきことになったのである。

しかし、「六条院」の本質をあくまでも「政治的」なものとして促え、光源氏の言動のほとんどすべてを政権確立への打算と決めつける見方は根強い。それらによれば、須磨・明石から帰京した光源氏は、それまでの光源氏とは異なる「政治的」人間へと「変貌」し、さまざまな策謀を弄しながら権勢家への道をひたはしる人物とされている。そして今や、こうした見方は常識ですらあると言ってもよい。

だが、本当に光源氏は権力欲にとりつかれた一介の権勢家へと成り果てたのであろうか。私はそのことに大きな疑問をいだかずにはいられない。すなわち、光源氏を「政治的」な面からのみ解釈することに本質的な錯誤を感じないではいられないのである。

「政治的」と受け取られているものの一つに「絵合」の行事がある。これまで「絵合」は、光源氏がみずからの政権を確立するための「政治的」な催しとしてもっぱら解釈されてきた。しかし、そのような理解は本当に正しいのであろうか。

そこで、ここでは「絵合」の行事を取り上げ、これまで「政治的」な面からのみ扱われてきた「絵合」の真相を考察し、そこに込められた作者の真意を明らかにしてみたいと思う。

二　絵合の意義

『源氏物語』における「絵合」の行事はおおよそ次のようなものである。

冷泉帝のもとには権中納言（昔の頭中将）の娘である弘徽

殿女御と光源氏の養女である斎宮女御とが仕えていたが、帝は年長である斎宮には気がおかれて、その寵愛は弘徽殿の方に傾きがちであった。ところが、絵をたいそう好まれた帝は、絵の上手な斎宮の方にお越しになることが多くなり、お心も次第にそちらへと移って来られるご様子であった。すると、自分の娘弘徽殿の立場が劣勢であることを案じた権中納言は、帝の寵愛を弘徽殿に向けさせ、後宮での態勢を挽回しようと躍起になり、贅を尽くした絵を絵師たちに描かせては弘徽殿のもとに集めさせた。そしてそれらの絵を弘徽殿のもとでのみ帝にお見せして、独り占めにしていたのである。そのことを知った光源氏は、権中納言の大人気なさに呆れ、それなら帝には自分が所蔵する絵をご覧に入れようと厨子を開けて、由緒のある絵を選び始めた。すると、権中納言はこれに負けじとさらに立派な絵を次々と描かせ、一方の光源氏も同じことなら良いものをご覧に入れようと特別優れた絵を念入りに集めることになっていった。こうして双方が絵を集めることに夢中で、女房たちの話題もそのことで持ち切りだった三月のある日、藤壺の御前で「絵合」が催されることになった。斎宮側と弘徽殿側とに分かれ、『竹取物語』には『宇津保物語』、『伊勢物語』には『正三位』が合わされたが、勝敗がつかなかった。そのため、勝負はついに帝の御前にまで持ち越されることになった。当日、清涼殿には帝の御座所がしつらえられ、美々しく晴れがましい儀式として「絵合」が開催された。風流の聞こえ高い帥宮を判者に、「月次絵」や「年中行事絵巻」などの作品が次々と争われていったが、いずれ劣らぬ名品揃いのためなかなか決着がつかず、最後の最後に光源氏が須磨に流離したおりに描いた絵日記が提出され、あわれ極まる光源氏の絵に双方の誰もが感涙にむせぶ中、「絵合」の行事は斎宮方の勝利に終わった。「絵合」が果てた後には、光源氏と帥宮との間で学芸・芸道論が交され、権中納言も加わって管絃の遊びに興じることが夜明けにまで及んだ。後日、光源氏は須磨の絵日記を藤壺に献上するのであった。

「絵合」の行事は、以上のような経過をたどって記されている。

さて、この「絵合」という行事は、これまでどのようなものとして理解されてきたのであろうか。

研究史をたどってみると、「絵合」を正面から扱ったものは勿論、「絵合」自体に言及したものがきわめて少ない事実にまず驚かされる。これは、「絵合」の行事が物語の主要な流れからは外れ、一見したところ特別深い意味があるようには受け取られなかったために、とりたてて関心を寄せられることもなく読み流されてきたからにほかならない。

それは花やかな宮廷の催しではあるが―そして当時としては興味の多いことであったろうが―一種の風俗物語であって、今日では感興が少ない。しかしこれから始まる華麗な宮廷生活の序曲であり、花やかさのかげに、源氏に対する頭中将のいどみ心などもあって、比較的力をつくして語られているが、絵合そのものが宮廷人消閑の遊楽的行事であり、風俗小説が持つ人生への突こみ方の浅さを、この物語ももっている。（中略）結局源氏の栄花生活のひとこまを描くものといえよう(3)。

すなわち、華美なだけでたわいのない宮廷行事の一場面として軽視されてきたと言っても過言ではないのである。

そうしたなかで、一見華美なだけの行事の背後に激しい政

争の意図を読み取ろうとする見方がある。

光源氏の後宮政策は着々と成功して行く。藤壺の督促で光源氏の養女はやがて入内した。帝より九歳年長というこの梅壺女御に対して、弘徽殿女御は一歳年長である。帝の親愛は弘徽殿に強い。光源氏と藤壺との協力によって、それを梅壺女御へと引移そうとするのが絵合の催である。このような後宮世界の閑雅な趣味、はなやかな遊戯も、微妙に権勢家の勢力関係とひびきあっていたのである。背後にひしめく激烈な権勢欲をこの「絵合」巻は心にくく写している(4)。

絵合巻は、冒頭から前斎宮の入内という政治的匂いが立ちこめる。須磨退居という政治的敗北を喫した光源氏が晴れて都に召喚され、冷泉帝の後見として政界に立つことになった今、摂関政治体制における権力獲得の常道たる帝の外戚となるために、六条御息所の娘を養女として、冷泉帝の後宮に入れようとするのである。この巻に語られる源氏と権中納言の政治的対立はまさしく摂関政治体制における政争そのものであって、源氏や藤壺中宮の動き、権中納言の不安等には当時の政争の匂いを十分に感じる。絵合という優雅な催しの中に争いの心はこめられたのである(5)。

絵合巻に至って、冷泉帝の御前で秋好方と弘徽殿方に分かれて、各々秘蔵の絵をきそう絵合の催しが花やかに開かれる。時は三月二十日すぎの晩春の宵、風雅をもって鳴る螢宮を判者に招いて催されたこの行事は、王朝風流の粋、みやびの最たるものであろう。だがこの華麗な行事の基底にあって、これを支えているものは、光源氏の権力への意志であり、局面を自派に有利に展開させようとする一流の策謀なのだ。(中略) 生来絵が好きな帝は、秋好の画才を知って繁く渡って来るようになる。これを知った弘徽殿の父頭中将(当時権中納言、祖父太政大臣の養女として入内さす)は、負けじと画工たちに腕をふるわせ、娘女御のもとに送りこむ。こうして宮中は時ならぬ絵画ブームとなるが、そうした熱中ぶりも、絵画への関心の度合いが、ただちに帝の覚えの程度となり、宮中での自己の地位にかかわってくるという、底を洗えば風流などとのんびりしたものではないのである(6)。

みやびやかな後宮にふさわしい絵をめぐる競争である。梅壺の御方、すなわち源氏の用意するのは名高い古の物語であるのに対し、弘徽殿のほう、すなわち頭の中将は当世風の珍しいものをかかせる。こうした対照は、絵についての趣味上のことをとおして、二つの勢力の対立する世界をきわだたせる。作者は、政治的な勢力争いを、物語にふさわしく優美な事柄であらわそうとするのである(7)。

前斎宮は入内して梅壺女御と呼ばれるが、物語は弘徽殿女御との間に繰り広げられる絵合の行事を描いて、華麗優美な宮廷絵巻を現出している。当代を代表する二大権門が、それぞれ女御を擁して帝寵を争う様態は、まさに王朝盛時の宮廷現実を写す趣きがある。それを「絵合」という空前の行事を創出して、物語批評を交えながら悠々

と語りきるところに、作者の天才があったと言わなければならないのだが、平安王朝の現実を写したと見るには、絵合の争いはあまりに唯美的にすぎる点に注意を払いたい。後宮の現実はもっとドロドロしたものであったはずで（中略）絵合巻の争いは奇麗事にすぎる（8）。

これらによれば、「王朝風流の粋、みやびの最たるもの」であり、「後宮世界の閑雅な趣味、はなやかな遊戯」であるところの絵合の行事は、「華麗優美な宮廷絵巻」としての背後に、「女御を擁して帝寵を争う」という「摂関政治体制における権力獲得」への光源氏「一流の策謀」と「激烈な権勢欲」とがひしめいていた、ということになる。

つまり一見華やかで風雅な催しに思われる「絵合」の行事が、実際には政権獲得への策謀うずまく政争にほかならなかったというのがこれらに共通する見解なのである。

このように見てくると、「絵合」の行事をめぐっては、「絵合」をただ単に華美なだけでたわいのない宮廷行事の描写とみなす立場がある一方で、そうした優雅で華麗な描写の背後に政権獲得への激しい政争を読み取ろうとする見方があり、現在では後者の見方が有力であり、通説化していることがわかる。

だが、これらの見方は、いずれにしても「絵合」の理解としては充分とは言い難いのではなかろうか。前者の見方はあまりにも皮相的過ぎようし、かといって後者の見方に従うことにも大きな抵抗が伴なうからである。源氏研究者の多くは「絵合」の行事から政治的意義だけを重視し、そこに「絵合」の本質をみようとしている。たしかに、この行事が光源氏の政治的立場を有利にさせ、政権安定への重要な布石の一つとなったことは否めない事実であろう。だが、それはあくまでも「絵合」が光源氏にもたらした結果なのであって、光源氏がそれをあらかじめ意図し、そのために権謀術数を弄したように言うのは実態にそぐわないように思われる。つまり、光源氏の行為を政治的意図一色で説明することには疑問をいだかずにはいられないのである。

もともと光源氏には権謀術数を弄するどころか、帝寵をめぐって政敵と争うという意識すらなかったのではなかろうか。そのことを本文に即して述べてみよう。

三　絵合と政争

そもそも「絵合」の行事は、絵のお好きな冷泉帝が絵の上手な斎宮の方にばかり親しんで、自分の娘である弘徽殿の立場が劣勢になったことを案じた権中納言の焦燥に端を発している。権中納言は斎宮に傾いた帝寵を弘徽殿に向けさせ、後宮での優位を回復しようと謀ったのである。

> 権中納言聞きたまひて、あくまでかどかどしくいまめきたまへる御心にて、我人に劣りなむやと思しはげみて、すぐれたる上手（じやうず）どもを召し取りて、いみじくいましめて、またなきさまなる絵どもを、二なき紙どもに描き集めさせたまふ。
>
> （「絵合」　三七六頁）（9）

権中納言は、負けずぎらいな性格で、こちらも引けを取ってなるものかと対抗意識を出し、優れた絵の名人たちを召し集めて、類いまれな絵を最高の紙につぎつぎと描かせた、と

いうのである。彼は、それらの絵を弘徽殿のもとで帝にのみご覧に入れ、ひどく出し惜しみをして、独占していたのである。

そのことを知った光源氏は、権中納言の大人気なさが相変わらずであることに呆れる。

大臣聞きたまひて、「なほ権中納言の御心ばへの若々しさこそあらたまりがたかめれ」など笑ひたまふ。「あながちに隠して、心やすくも御覧ぜさせず、悩ましきこゆる、いとめざましや。古代の御絵どものはべる、まゐらせむ」と奏したまひて、殿に古きも新しきも絵ども入りたる御厨子ども開かせたまひて、女君ともろともに、いまめかしきはそれそれと選りととのへさせたまふ。

（「絵合」　三七七頁）

光源氏は、権中納言がむやみに隠し立てをして気やすくご覧に入れず、帝にお気をもませているとは呆れ返ったことだ、私のところに昔の絵がいろいろあるのでそれを差し上げようと奏上なさって、古い絵から新しい絵までを数々納めてある厨子をいくつも開けさせて適当な絵を選び始めた、というのである。

こうしたいきさつを見る限り、帝寵を独占しようと躍起になっているのは権中納言ひとりだけであって、光源氏自身にはそうした意識すらないことがわかる。光源氏が数々の絵を集めていることを伝え聞いた権中納言が、負けてなるものかと「いとど心を尽くして、軸、表紙、紐の飾りいよいよととのへたまふ。」（「絵合」　三七九頁）とあるように、権中納言の競争心が絵画そのものではなかったことは明らかだ。光源氏がみずからの厨子を開いて良い絵を選び出そうとしたのは、権中納言への対抗意識からというのではなく、狭量な権中納言のせいで見たい絵が自由に見られない帝のために、少しでも良い絵を見ていただきたいという一念からと受取るべきであろう。そしてこの思いはこの後にも変わりがなく、光源氏は折角ご覧に入れるなら帝に少しでもご満足していただけるものをお目にかけたいという思いから名画を厳選しているのである。

すなわち、以上のことから推察すれば、「絵合」の行事に対して光源氏が政争に勝利しようとする意図や政権を独占しようとする魂胆をいだいていたように考えるのは誤りだと言えるのではなかろうか。たしかに、光源氏は「絵合」に対して積極的な姿勢で臨んではいるが、それは別段「政治的」な効果を狙ってのことではなく、一言でいえば文化的伝統の創始を意図してのことなのである。「絵合」の巻の結び近くには次のように記されている。

さるべき節会どもにも、この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例を添へむと思し、私ざまのかかるはかなき御遊びもめづらしき筋にせさせたまひて、いみじき盛りの御世なり。

（「絵合」　三九二頁）

光源氏はしかるべき節会などの場合でも、この御代から始まったと後の世の人々が語り伝えるような新しい例を加えようと思って、ほんの私事に過ぎないこのようなちょっとした遊び事にも目新しい趣向を凝らされるので、まことに盛んな御代である、というのである。

これによれば、光源氏は、「はかなき御遊び」である「絵合」が新しい文化の嚆矢として後世の人々から仰がれるものとなるように企図していたことがわかる。光源氏はもともと、美的ではかない遊戯に新奇な趣向をふんだんに盛り込むことによって新たな文化的伝統を創造することにこそ意義を見出だしていたのであって、政争に勝利することなど眼中になかったと考えられよう。

そのことは、「絵合」に勝利したのちに光源氏がいだいた感慨にも如実に表わされている。

大臣ぞ、なほ常なきものに世を思して、いますこしおとなびおはしますと見たてまつりて、なほ世を背きなんと深く思ほすべかめる。昔の例を見聞くにも、齢足らで官位高くのぼり世に抜けぬる人の、長くえ保たぬわざなりけり。この御世には、身のほどおぼえ過ぎにたり。中ごろなきになりて沈みたりし愁へにかはりて、今までもながらふるなり。今より後の栄えはなほ命うしろめたし。静かに籠りゐて、後の世のことをつとめ、かつは齢をも延べん、と思ほして、山里ののどかなるを占めて、御堂を作らせたまひ、仏経のいとなみ添へてせさせたまふ……

（「絵合」　三九二頁）

光源氏は、世の中を無常なものに思って、帝がもう少し大人になられるのを見届けてから世を逃れて出家しようと深く考えていらっしゃる。この世で自分は官位も人望もすでに身の程を過ぎたものになってしまっている。これから後の栄華はいのちが気がかりだ。静かに引き籠って後の世のために勤行をしようと思われ、山里の閑静な土地に御堂をお造りになり、仏像や経巻の供養もあわせておさせになられる、というのである。

この記述は、光源氏が誰かに向かって語ったものではない以上、本心を隠して体裁を繕ったものではなく、光源氏の偽らざる心境をそのまま表現したものと見てよいであろう。だとすれば、これはみずからの養女が後宮で有利な立場となるように画策し、それを見事なし遂げてゆるぎない権勢家への道が約束された者の感慨としては、あまりにも不相応なのではなかろうか。立身出世という現世的な成功を期待する者が同時に出家への強い願望をいだくというのはどう考えても不自然なのである。なるほど、こうした矛盾については、「栄華の底にあやういものを感じればこその無常感ではあるまいか。そこから生ずる不安をとりしずめようとするのが道心志向なのである」(10) とする意見があるかと思えば、「源氏がふと出家を思ったことはあったが、（中略）この絵合巻巻尾の記述は、いささか唐突で不自然な印象をぬぐいえない。作者の願望の分裂を示すものであろう」(11) などと作者による作品形象の「分裂」にまで帰する見解さえ出されている。が、むしろ道心こそ光源氏の本心であったとみるべきではなかろうか。すなわち光源氏にとって、「絵合」の行事は「政治的」なものではなかったということができるのである。

四　天徳内裏歌合

このように、「絵合」の行事が光源氏にとって「政治的」なものでなかったということは、本文の表現によっても明らかなのだが、このことは、さらに作品を成り立たせている作者の意図を考察することによっても同じように確認すること

が可能である。

紫式部はいったい「絵合」によって何を示し、何を語ろうとしたのであろうか。

作者の意図を忖度するにあたって、そのみちびきとなるきわめて重要な事柄がある。それは、帝の御前での「絵合」が「天徳内裏歌合」を典拠としているという事実である。すなわち、物語のなかの「絵合」が「天徳内裏歌合」という実際の行事をそっくり踏まえて書かれているのである。このことをはじめて明確に指摘したのは四辻善成の『河海抄』であるが、これは「絵合」に込められた作者の意図を知る上において決定的な意味をもっていたと言えよう。

物語における帝の御前での「絵合」は次のように書き出されている。

その日と定めて、にはかなるやうなれど、をかしきさまにはかなうしなして、左右の御絵ども参らせたまふ。女房のさぶらひに御座よそはせて、北南方々分かれてさぶらふ。殿上人は後涼殿の簀子におのおの心寄せつつさぶらふ。左は紫檀の箱に蘇芳の華足、敷物には紫地の唐の錦、打敷は葡萄染の唐の綺なり。童六人、赤色に桜襲の汗衫、袙は紅に藤襲の織物なり。姿、用意などなべてならず見ゆ。右は沈の箱に浅香の下机、打敷は青地の高麗の錦、あしゆひの組、華足の心ばへなどいまめかし。童、青色に柳の汗衫、山吹襲の袙着たり、みな御前にかき立つ。上の女房前後と装束き分けたり。

（「絵合」　三八五頁）

「天徳内裏歌合」については、「御記」「殿上日記」「仮名日記」などの記録類が残され、行事の内容を詳細に知ることができる(12)。

それらによって両者を照らし合わせてみると、まずそれぞれの行事がいずれも同じ三月に催されていることがわかる。そしてそれぞれの行事が催された場所については、「絵合」本文が、「女房のさぶらひ」つまり清涼殿内の女房の詰め所である台盤所に帝の御座所を設け、女房たちが北と南にそれぞれ分かれて伺候し、殿上人は後涼殿の簀子に控えたとあるが、「天徳内裏歌合」の「殿上日記」でも清涼殿の台盤所に玉座をしつらえ、南に左方の女房、北に右方の女房がそれぞれの座をもうけ、後涼殿の簀子に殿上人の座が用意されたとあり、玉座はもちろんのこと左右の女房や殿上人たちの控えた座席の位置まで「天徳内裏歌合」と一致していることが知られる。

さらにこの時の調度類や服装の色彩に関しても両者の記述は一致し、「絵合」の後に、光源氏たちが管絃の遊びに興じる場面まで「天徳内裏歌合」に基づいていることがわかるのである(13)。

すなわち、物語のなかの「絵合」は実際にあった「天徳内裏歌合」の時期や場所、人物たちの配置、さらには調度類や服装の色彩などに細かな一致が見られ、この場面がまぎれもなく「天徳内裏歌合」の記録に基づいて書き上げられたことが確認されるのである。

このように、「絵合」の場面が「天徳内裏歌合」を踏まえて設定されているということが事実だとするならば、「絵合」に込められた作者の意図もまたこのことから切り離して考えることはできないはずである。

ところが、作者が「天徳内裏歌合」を踏まえた理由につい

ては、おおむね次のようなことが言われるばかりである。

冷泉院の御代が理想的な時であるとしたい作者の願望である。冷泉院時代の繁栄は、その父親である源氏の功績による。ここには外戚政治のしっかりした時代のような感を受く。と同時に冷泉帝は史上の村上天皇に準じていることは、ほぼ確実であるということから、いわゆる村上天皇の天暦の時代も、式部は念頭に入れていることを考えてよかろう。史上の村上天皇の御代はいわゆる聖代であって、「いみじき盛りの御世」であったことはいうまでもない。村上時代の天徳歌合を準拠としたという見解は、ここに意義が存する。（中略）とにかく式部は絵合の儀を象徴として、源氏の勢力の拡大および冷泉帝の御代が聖代であることをいいたかった。しっかりした史実を調べるのは当然であった(14)。

これによれば「絵合」は、「冷泉帝の御代」が「聖代」であることを示すことによって、父である光源氏の「功績」とそれによる「勢力の拡大」とを語るために、冷泉帝のモデルとされる「村上天皇」の時代の「天徳歌合」を踏まえて設定する必要があったのだ、ということになる。この見解は、すでに『海河抄』に述べられ、山中氏に限らず、多くの人々に支持されている見解だといってよかろう。清水好子氏も、前記の論考の中で「光源氏は冷泉院の御代が政治の上でも文化の上でもよき前例を創始されたと後代から仰ぎ見られるような治世たらしめんと努めた」と述べられている通りである。

だが、これがもし、ただ単に「聖代」であることを印象づけるためであるとか、「村上天皇」の時代であることが必要であったというような点にのみとどまるならば、それはこの「絵合」が「天徳内裏歌合」を踏まえたことの理解としては決して充分とは言い難いのではなかろうか。なぜなら、そこには「絵合」が「天徳内裏歌合」を踏まえる積極的な、いわば「天徳内裏歌合」でなければならないという絶対的な理由が見出だし難いからである。そのうえこうした見方もまた、結局のところ、光源氏の「功績」とそれによる「勢力の拡大」とに帰せられている以上、「政治的」な解釈から一歩も出ていないということになるのではなかろうか。

紫式部が「天徳内裏歌合」を踏まえたことには「天徳内裏歌合」でなければならない理由があった。そのために式部は、「絵合」の記述を読んだ人々が「天徳内裏歌合」という歴史的事例を想起するように仕組んだのである。なぜなら、ここには「天徳内裏歌合」を踏まえることによって「絵合」そのものを語ろうとする式部の趣向があったからである。つまり、式部は「絵合」について語るために、是非とも「天徳内裏歌合」を踏まえる必要があり、それはどうしても「天徳内裏歌合」でなければならなかったのではなかろうか。

五　風騒の道

たとえば、「天徳内裏歌合」について記した「御記」の冒頭を見てみよう。この部分は、「絵合」との比較がたびたび試みられながら、これまでまったく着目されることのなかった記述である。ここにはこの「歌合」が催されるに至ったそもそもの意図が明確に記されている。

「御記」は次のように言う。

天徳四年三月卅日己巳、此日、有女房歌合事。去年秋八月、殿上侍臣闘レ詩。爾時、典侍命婦等相語曰、「男已闘文章、女宜合和歌」。及今年二月、定左右方人。就中以更衣藤原修子・同有序等為左右頭、各令挑読。蓋此為惜風騒之道徒以廃絶也。後代之不知意者、恐成好浮華専内寵之謗。仍具記之(15)。

天徳四年三月三十日、女房たちによる歌合があった。前年の秋に殿上で詩合があり、男たちが漢詩を闘わせたのを受けて、女たちが和歌を合わせたのである。今年の二月、左右それぞれの方人が定められ、それぞれの頭には村上帝に仕える二人の更衣が並び立った。しかしこれは「風騒の道」がむなしく廃れてしまうことを惜しんで催されたものである。後の世の人々で、その意図をわきまえない者は、恐らく「浮華」を好み、「内寵」を独占しようとしてのことだと非難することであろう。そこでつぶさにこれを記し置くのだ、というのである。

ここで注目したいのは、この歌合が催された本来の意図が明確に打ち出されている点である。これによれば、「天徳内裏歌合」は「風騒の道」がむなしく廃れてしまうことを惜しんで催されたということになる。「風騒」とは詩歌などにおける「風流韻事」(16)を意味し、それが廃れることのないように和歌が合わされていることから鑑みて、「風騒の道」とはこの場合日本的な風雅の道とでも言うべきものであろうか。つまり、この「天徳内裏歌合」は日本的な風雅の道が廃れてしまうことを愛惜するがゆえに企画され、開催された歌合だったということが知られるのである。それにもかかわらず、後の世の人々はそうした本来の意図をわきまえずに、この催しをただ単に「浮華」を好み、「内寵」を独占しようとしてのことだと非難するに違いない。すなわち、表面ばかりが華美で、内容のない軽薄な行事だ、あるいは帝の寵愛を独占しようという魂胆からなされた行事だと非難するに相違ないというのだ。しかし、あたかも華やかなだけの催し事に見え、あるいはどれほど帝寵を奪い合っているかのように見えようとも、その本質は「風騒の道」が衰えてゆくのを純粋に惜しむがゆえの催しなのであって、後の世の人々がその真意を汲み誤らないためにこのことを詳細に書き残して置く、と「御記」は言うのである。ここには国風文化を死守しようとする「天徳内裏歌合」の存立にかかわる真摯な精神が刻み込まれているといえよう。

この「御記」の記述は、「絵合」の真相を考察するにあたってまことに示唆的ではなかろうか。

それというのも、すでに見た通り『源氏物語』における「絵合」の行事もまた、ただ単に「浮華」を好み、「内寵」を独占しようとする行事としてこれまで理解されてきたからである。すなわち、「絵合」の行事はこれまで華やかなだけの遊技として軽視され、あるいは帝寵を奪い合う政争の具という視点からばかり論じられてきた。しかし、その「絵合」が「天徳内裏歌合」を踏まえているという動かし難い事実は、「絵合」の本質がそれらのいずれでもなく、「風騒の道」にこそあったことを暗に示しているのではなかろうか。このことは、光源氏が「はかなき御遊び」に対しても文化的伝統の創始を心がけていたことと共通している。式部は「絵合」における真の意図を「風騒の道」の実現にこそ置いていた。そしてそのために是非とも「天徳内裏歌合」を踏まえる必要があっ

た。つまり式部は、「天徳内裏歌合」を踏まえることによって、物語上の架空の「絵合」に新たな意味を付加しようと試みたのではなかったろうか。

そもそも「天徳内裏歌合」というのは、村上天皇の天徳四（九六〇）年三月三十日、内裏の清涼殿において催された歌合で、数ある歌合のなかでも「歌合史上最大の規模と盛儀を持った空前絶後の大歌合」であり「歌合史上の玉座」(17)に位置すると評価される歌合である。伝説的な名勝負として知られる、壬生忠見の「恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひ初めしか」と平兼盛の「忍ぶれど色にいでにけり我が恋はものや思ふと人の問ふまで」という名歌が披露されたのも、このときの歌合だった。この歌合以前にも「在民部卿家歌合」「寛平御時后宮歌合」「亭子院歌合」など史上名高い歌合はいくつも存在したが、内裏という晴れの場で空前の規模をもって催された歌合はこれがはじめてであり、後世、歌合の模範として仰がれた、歌合の中の歌合こそこの「天徳内裏歌合」だったのである。『源氏物語』に登場する「絵合」が「天徳内裏歌合」を踏まえているという事実は、この歌合が担わされている、そのような歴史的意義と不可分のことではないはずである。

作者が『源氏物語』のなかで「絵合」を執筆した時期以前に、史実としての「絵合」の記録は残されていない。ということは、作者は架空の「絵合」を物語のなかに現出させたことになる。だが、ここで殊更に留意しなければならないことは、ここに言う「絵合」がその内実を見る限りにおいて、実際には「絵合」とは言い難いという事実である。なるほど、たしかにここには多くの絵画が提示され、それについてのさまざまな論議が記録されている。しかしここで話題となる事柄のほとんどは絵画そのものの優劣とは無関係で、むしろその絵が基づいた物語、しかもその内容や主人公の行動に対する批判や中傷ばかりであって、「絵合」とは名ばかりであることがわかる。作者は、権中納言の口を借りて、「物語絵こそ心ばへ見えて見どころあるものなれ」、すなわち心境がつかみやすく見ごたえのあるものは物語絵に極まるとして、物語絵こそが対象であることを、「絵合」に先立ってあらかじめ明言している。つまり、この「絵合」は、「物語絵合」であり、実質的には「物語合」、すなわち「絵合」という名の「物語合」であったということになるのである。式部は「絵合」の行事において実は「物語」を合わせ、「物語」そのものについて論じようとしたのではなかったろうか。

もともと「天徳内裏歌合」が催されたきっかけは、「御記」冒頭によれば、前年の秋に内裏でもって男性たちによって行われた、日本で最初の詩合に触発されてのことだという。つまりこの歌合は、「漢詩」の競い合いに対抗する形で催されたのであり、「漢詩」に対して「和歌」を対峙させようとする試みだったわけである。その「天徳内裏歌合」を踏まえた「絵合」、すなわち「絵合」という名の「物語合」は、「和歌」に対する「物語」の存在を主張しようとしたものではなかったろうか。当時「物語」の地位は極端に低く、実際に「物語合」が開催されたとする記述は天喜三（一〇五五）年を待たなければならず、これとて物語中の和歌をもっぱら論ずるというありさまだった。

つまり、「和歌」が内裏においてその地位を獲得し、風雅の具としての価値を公に認められた記念すべき歌合が「天徳内裏歌合」だとするならば、それを踏まえた「絵合」は、未だ見ぬ「物語合」が内裏において公式に催される場面を作品

のなかに仮想することによって、「物語文学」の存在とその意義とを高らかに謳った「物語」の独立宣言だったのではなかったろうか。「絵合」と名乗りながら物語のなかで「物語」そのものの価値を公認させること、そこにこそ作者紫式部の真の意図が秘められていた。ここには「絵合」に名を借りて「物語」を称揚しようとする紫式部の野心的な意図と、「物語文学」に寄せる見果てぬ夢とが逆巻いていたのである。(18)

注

(1) 杉浦一雄「源氏物語の源泉」(「千葉商大紀要」第三十七巻第四号、平成12・3)

(2) 杉浦一雄「源氏物語と根の国」(「千葉商大紀要」第三十八巻第一号、平成12・6)

(3) 重松信弘氏『増訂　源氏物語の構想と鑑賞』(初版昭和37・2、増訂版昭和57・3)

(4) 秋山虔氏「源氏物語の後宮世界」(「解釈と鑑賞」、昭和34・4)

(5) 森一郎氏「絵合巻をめぐって――源氏物語の方法――」(「解釈」、昭和38・8、『源氏物語の方法』所収)

(6) 伊藤博氏「『澪標』以後――光源氏の変貌――」(「日本学」、昭和40・6、『源氏物語の基底と創造』所収)

(7) 玉上琢弥氏『源氏物語評釈』第四巻(昭和40)

(8) 大朝雄二氏「冷泉院の後宮」(「講座　源氏物語の世界」第四集、昭和55)

(9) 『源氏物語』の本文は、「新編　日本古典文学全集」(小学館)の『源氏物語』に拠る。

(10) 森一郎氏「栄華と道心」(『講座　源氏物語の世界』第四集、昭和55)

(11) 伊藤博氏、注(6)前掲論文。

(12) 萩谷朴氏『平安朝歌合大成』二に翻刻と校異がある。

(13) 両者の比較については、清水好子氏「源氏物語『絵合』巻の考察――附、河海抄の意義――」(「文学」、昭和36・7、『源氏物語の文体と方法』所収)、石田穣二氏「絵合と天徳四年内裏歌合」(『講座　源氏物語の世界』第四集、昭和55)などに詳しい。

(14) 山中裕氏「源氏物語の準拠と構想」(『平安朝文学の史的研究』、昭和49)

(15) 「御記」の本文は、萩谷朴・谷山茂氏校注の日本古典文学大系『歌合集』(昭40)に拠る。

(16) 諸橋轍次氏『大漢和辞典』巻十二。

(17) 峯岸義秋氏校註の日本古典全書『歌合集』(昭和22)の解説。

(18) 清水好子氏は、注(13)の前掲論文「源氏物語『絵合』巻の考察――附、河海抄の意義――」において、「帝の御前の絵合が歌合がはじめて宮廷に認められた紀念すべき行事を模するところに、物語が晴れの場にとりあげられるという紫式部の夢、物語作者としての大きな抱負がうかがえるのではないかと、以前は考えていたが、(『源氏物語事典』梗概)それは行き過ぎのようであった。／というのは、冷泉帝御前の絵合ははたして物語絵合だったのだろうか、はなはだ疑わしい。物語本文には物語絵が出たとは一言も書いていない。否定はしていないが、触れていないのである。」と記され、前言を否定されているが、むしろ前言こそ正鵠を射たご発言として高く評価すべきかと思われる。

〔抄　録〕

本稿は、『源氏物語』における「絵合」の行事を取り上げ、そこに込められた作者の真意を明らかにすることを目的としている。

これまで「絵合」の行事は、光源氏が宮廷内での勢力を拡大するための「政治的」な催しとしてもっぱら解釈されてきた。すなわち、一見優雅で華麗な描写の背後に政権獲得への激しい政争が隠されていると一般に理解されてきたのである。しかし、本稿ではそうした通説を排し、少なくともこの時の光源氏は、新たな文化的伝統の創始にこそ意義を見出だす人物として設定されていることを主張する。その根拠の一つが、「絵合」の準拠とされる「天徳内裏歌合」の冒頭に掲げられた「御記」の記述である。ここには、この「歌合」の催しが日本的な風雅の道が廃れることを愛惜するゆえに開催されたとあり、仮りにも帝の寵愛を独占しようとしての催しと誤解してはならない旨が明記されている。『源氏物語』の作者は、「天徳内裏歌合」の行事を踏まえることによって、一見「政治的」とも見える「絵合」の行事が、実は「政治的」ではないことを暗示していたと考えることができるのではなかろうか。